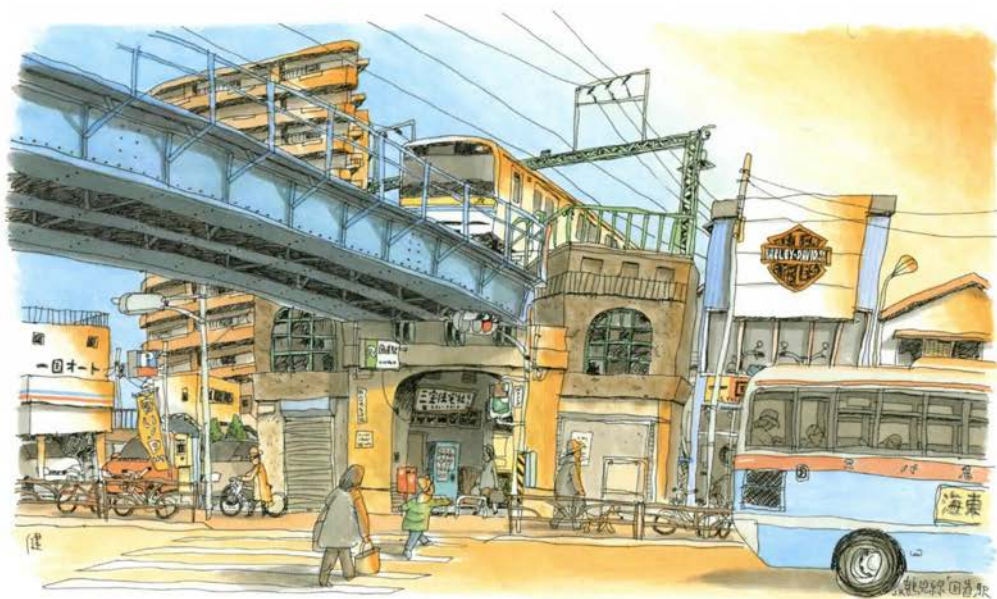


浄土

monthly
JŌDO

2012 **10** October



駅

をめぐる
点景

絵

2012年の表紙

村上健

JR鶴見線

国道駅

JR鶴見線国道駅のホームは相対式二面で、高架。無人駅。改札に向かえばアーチ状の橋脚の下をしばらく歩くことになる。まさにガード下。昭和初期の地下道を模して造った映画のセットのような雰囲気が面白い。さきの戦争の際の米軍の機銃掃射で破壊された跡がそのまま残っていたり、店舗兼住宅の跡も昭和五年開業時そのまま。鉄道マニアだけでなく廃墟マニアも必見の、さながら歴史館とでもいうべき構内である。

10月

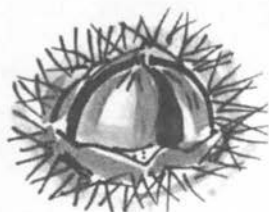
浄土

2012/10月号 目次

法然上人と平家の人々	講演=石丸晶子	2
会いたい人 麻実れいさん②	関 容子	12
連載小説 渡辺海旭	前田和男	22
響流十方	小村正孝	30
極楽に帰った法然上人	石丸晶子	34
誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよろう	47
編集後記		48

表紙裏・ 駅をめぐる点景 村上 健

背表紙裏・ 泰雲の美味探訪



表紙題字=中村康隆元浄土門主
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

法然上人
讃仰会
講演概録

平成二十四年八月二十二日 於増上寺慈雲閣

法然上人と 平家の人々

第一回

東京経済大学名誉教授

石丸晶子

「法然上人と平家の人々」という問題に、私は以前から関心を持っていたのですが、一昨年法然上人鑽仰会の講演会で、町田宗鳳先生が法然上人についてお話しになり、終わられてからの質疑応答に、どなたかが「法然上人下山後のご生活を支えていたのはどなたであったと思われますか」というような質問をされました。

法然上人下山後のご生活、つまり下山されたあと、比叡山の経済的な援助を受けることはできません。法然上人も仙人ではありませんので、経済的基盤がなければご生活できないわけです。

歴史及び史料は、法然上人は比叡山をおりられたあと遊蓮房のもとに行かれて、そこで二年間生活をとともにされ、遊蓮房の死後、念仏信仰を一層確実なものとされた、そして東山の今の知恩院のところにいらして、そこに草庵をおつくりになり、四国流罪の間を除いて、生涯そこでお過ごしになったと言われています。

法然様が非常に有名になって、人々が押しかけるようになったのは一九〇年前後です。建久年間のことです。

すると、人々が押しかけてくる以前、法然上人が山をおりられてから最初の二年間は、遊蓮房と生活をともにされて衣食の心配がなかったにせよ、その後どなたかの援助がなければご生活できません。

そういうご質問をされた方に対して、町田先生はすぐ、「それは秦氏はたうじでしょう」と。秦氏は法然上人のお母様の実家です。「秦氏は京都の大地主でしたから」というご返答でした。

実は私も、法然上人下山後の御生活を一体だれが支えていたのだろうということは、そ

れ以前から何度か小耳に挟んだこともありましたが、史料で読んだこともありましたが。

そこでは確かに秦氏だろうとか、或いは通憲（信西）の数^{あま}た多い子供の中で、是憲（遊蓮房）の兄弟の澄憲だろうとか耳にして参りました。比叡山系の有名な坊様です。この方は非常な美男であり、お声がよくて、お説教がとても上手だったそうです。それで人氣が高く、都中に知れ渡った人で、この澄憲が遊蓮房の兄弟ですから、遊蓮房と法然上人は親しかったところから、澄憲ではなからうかというような説も聞いたことがあります。しかし、私は遊蓮房の兄弟の澄憲でもない、あるいはご実家の秦氏でもないと考えるのです。

まず第一、秦氏ということにつきましては、出家した方が山をおりてすぐ実家にすぐろうとするものだろうか。しかも、実家といっても、お父様もお母様ももう既にそのとき亡くなっているわけで、五百年、六百年前にご先祖が一緒だったというような秦氏を頼って、ご生活をする目当てをつけ、比叡山をおりたりなさるだろうかという疑問が、最初からありました。

しかし、法然上人下山後のご生活を支えていたのが誰であったということを明示する確実な史料というものはありません。ですから、秦氏であったというのも澄憲であったろうというのも、いずれも推測の域を出ないわけですが、私はここにもっと確実な、下山後のご生活を支え、法然上人に帰依していた人あるいは一族として、平家を挙げたいとおっております。

まず、知恩院の今の伊藤唯真親下は、浄土選書『法然の世紀』（浄土宗出版）の中の「念仏ひじりの光彩（かがやき）」という章の中で、浄土宗二祖聖光房弁長の『浄土宗要集』

の一節に、「平重盛は法然上人年来の檀那であつた」という一文があることを記しておられます。

私は平家の人々によって法然上人のご生活は下山直後から支えてもらえたので、上人は山をおりることができたと思うのです。

そして、その前提となつたのが、この「平重盛は法然上人年来の檀那であつた」と弁長が書いてありますように、平重盛を初めとする平家一族の人々であつたと思います。それが今回の結論です。

今、テレビで「平清盛」をやっています。平家はわずか二十年間ですが、非常に都に富み栄えた一族でした。そして、最後は皆様ご存じのように、清盛の後妻で後の二位尼時子となりますが、あの深田恭子さんが演じている時子が、御年八歳の安徳天皇を抱いて壇ノ浦の海に沈み、平家一族の人々も続々と海に沈んで、一門はそこで滅亡するわけですが、一一六〇年の保元の乱から数えてわずか二十年そこそこの栄華でありました。

そして、重盛は檀那であつた、法然上人を支えていた、ということですが、重盛は壇ノ浦以前に病没します。お父さんの平清盛よりも早く病没してしまうのです。治承三年（一一七九年）だったと思います。

しかし、この話のついでに重盛のほうから申しますと、『平家物語』によれば、こう書いてあるのです。平重盛は念仏信仰に深く帰依していて、阿弥陀の四十八願にならつて、四十八間の精舎を建て、その一間一間に灯籠を立て、さらに一間ごとに六人の美女を置いて、そこに点灯して大念仏会を催した。

そして、彼自身は一心不乱になつて念仏を唱えた。人々は、ねんぶつのおとし「念仏大臣」、あるいは、四

十八の灯籠を灯しますから、とうろうのおとし“灯籠大臣”と称したといふのです。

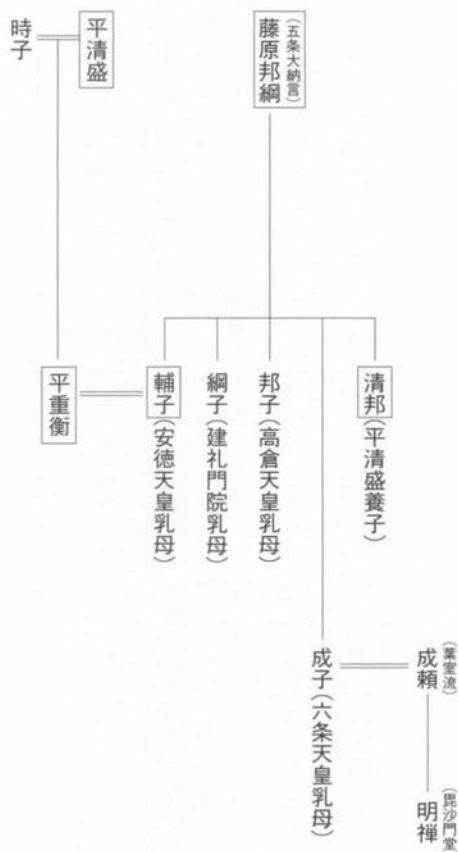
そのようにして重盛は、口称念仏くしょうに非常に深く帰依した人なのですが、重盛だけではなく、平家一門の人々が同じくこの法然様に深く帰依していたに違いないということを、これから見ていきたいと思います。

では、法然様に平家一門をつないだ人はだれだったのでしょう。法然上人ご自身は確かに岡山県美作のご出身で、お母様は秦氏の出だということが知られています。そしてその後、十三歳か十五歳で比叡山に登られました。そこで三十年近い歳月が過ぎ、一一七五年比叡山をおりて、口称念仏を広めるために都に出ていらつしやいました。

さて、法然上人の一番弟子と言われる方はどなたか、皆様もご存じだと思いますが、法蓮房信空上人という方です。この方は、十二歳で比叡山に登られ、黒谷の叡空上人の室に入られます。法然上人はちょうど二十五歳で南都遊学から戻られて、真剣に一切衆生救済を願う修行者として、同じ黒谷の叡空上人のもとで修行されているただ中でした。最初からの弟子おとこです。

その信空上人がどういふ血筋の方かと申しますと、まず、平清盛のお父さんである平忠盛、ドラマでは中井貴一さんがやっていました。清盛のお母さんがだれかははっきりしていませんが、とにかく平忠盛は自分の実子として、嫡子として清盛を育て、世間に公表したわけで、平忠盛（但し、清盛の実父は白河上皇ともいわれています）とどなたか女性との間に清盛が生まれます。

その平忠盛と別の女子との間には女の子が生まれています。この忠盛女ただのりめという人は、清盛とはお母さん違いのきょうだいです。そして、この平忠盛女はだれと結婚したかという



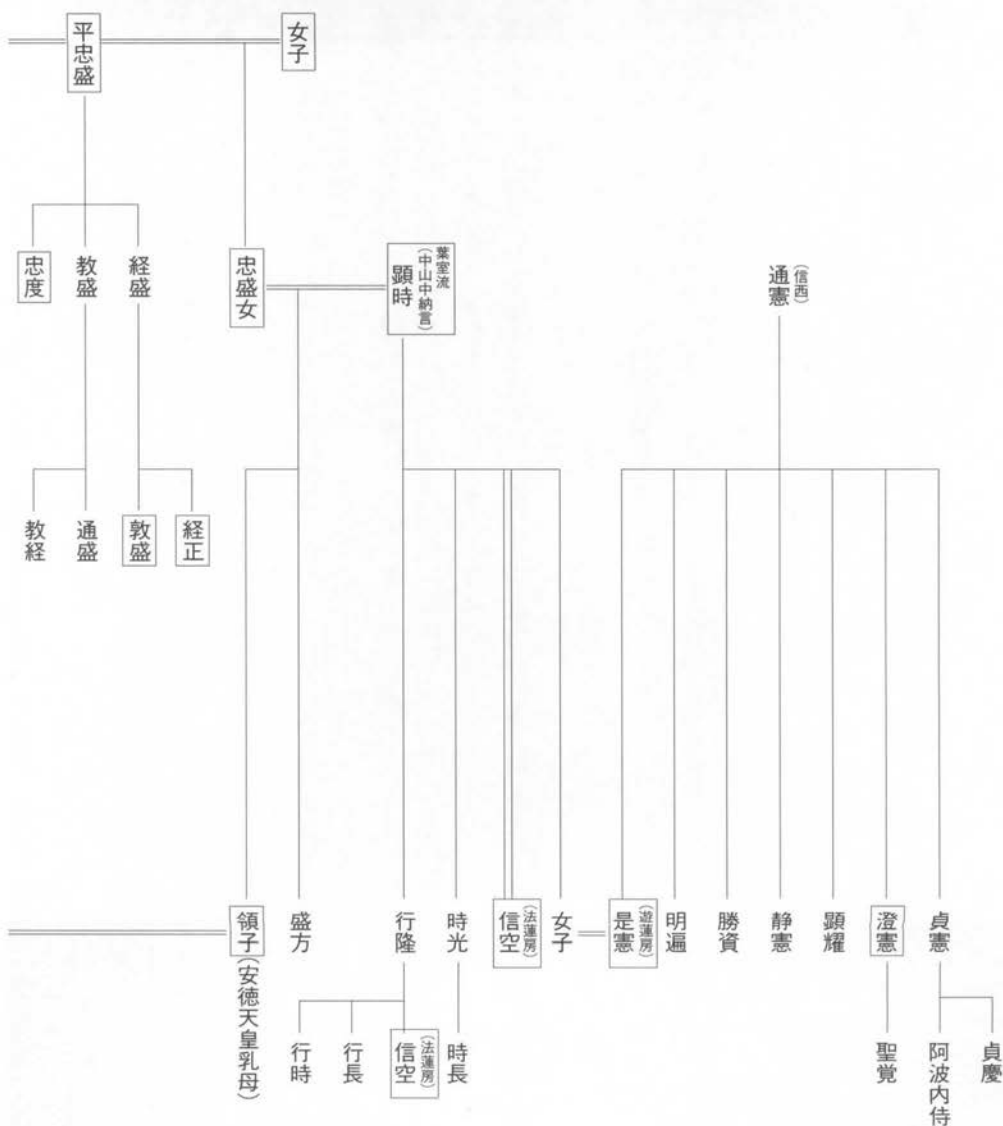
と、それは中山中納言顕時という人で。そして、この中山中納言顕時と忠盛女との間にだれが生まれたかという、盛方という男の子と、領子という女の子です。つまり領子は清盛の姪なのです。

ところで今注目していただきたいのはこの領子という人です。領子は将来安徳天皇の乳母となります。そして領子という人は森田剛さんがやっている平時忠の後妻でもありました。

平時忠は平時信の息子で、清盛の正妻時子の弟です。さらに滋子という妹もいます。この滋子は、後白河上皇に見初められて、最愛のお妃になるわけですが、二人の間に生まれたのが高倉天皇、あの有名な安徳天皇のお父さんの高倉天皇です。

もちろん、この時代、一夫多妻ですから、後白河上皇にはたくさんさんの妻がいたのですが、

略系図





その中でもこの滋子という人はものすごく愛されたと公郷の日記は記しています。

このことは非常に有名な話で、『玉葉』という藤原兼実の日記にも書いてあるのですが、非常にお気に入り、どこでも夫婦同伴の仲むつまじさで、希代なこと、前代未聞なことだと書かれています。

結局、さき程の領子という人は夫時忠を通して平家一門とつながっています。

その時忠は平家一門の清盛に次ぐナンバーツーの人であり「平家にあらずんば人にあらず」と豪語したことで名高い人です。そして平大納言と言われたこの平時忠の奥さんが領子であったのです。つまり、領子は時忠と結婚することで平家の中枢とつながったのです。しかし、それとともに領子自身も平家の血筋です。別に夫と結婚しなくても、平家の人です。それは先ほども申しましたように、このお母さんが平清盛と同じく平忠盛の娘だったからです。そして、このお母さんは清盛とは母親違いのきょうだいなのです。

だから、領子という人は血筋も平家の血筋であるし、夫と結婚したことによってさらに深く平家の人になった。血筋においても縁戚においても平家の真ただ中に入っていたという事です。

この領子という人の人柄ですが、非常に気が強くて、政治的なやり手で、自分の思いどおりのことを、悪口を言って、自分が嫌いな人を清盛に言いつけて、その人を京都から追放したり、いろいろなことをして、とにかく平清盛の奥さん、時子がナンバーワンの女性であるならば、領子がナンバーツーの女性であったと言われています。

私が次に言いたいのは、領子と、法然上人の一番弟子である法蓮房信空との関係です。信空は、平頼時の養子でした。お母さんは忠盛の娘ではないのですが、頼時にはほかの

女性との間にできた子供として、行隆、時光、そして養子として信空がおりました。

つまり信空は二様に資料に書かれています。行隆の息子としての信空と、顕時の養子としての信空です。

これについて申しますと、血筋から言うとな信空は顕時の孫です。顕時の息子の行隆のさらに子供ですから、顕時の孫ということになります。しかし、この中山中納言顕時という人は、息子の行隆に、奥さんが妊娠したときに、最初の子はとにかく生まれたときから私の子供にして、つまり養子にして、比叡山に送るという約束を息子から取りつけていました。

それで、息子行隆に生まれた長男の信空を、すぐに自分の養子にして、自分の家に引き取って、自分が育てたと書かれています。これは『平家物語』ではない、『尊卑分脈』という史料に書かれているわけです。

顕時という人はなぜそういうことをしたかというと、生まれた孫が年ごろになったら比叡山に預けて、自分たち葉室一族の極楽浄土への往生を願ってのことだと書かれております。

それで、おじいちゃんの願いどおり、この信空はお父さんの家ではなくおじいさんの家に引き取られて、おじいさんとともにおじいさんの子供として暮らし、十二歳になったときに比叡山に登ります。そして叡空上人の黒谷の房舎に入ります。兄弟子である法然上人とは十三歳の年の差です。その後十八年間ここ黒谷で生活を共にし、法然上人は四十三歳の時、ご存じのように黒谷を出て、一切衆生救済の念仏の道を広めるために都に下山されることになりました。

(つづく)

連載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

宝塚トップスターが退団する際のさよなら公演というのは、ものすごく華やかなものらしいが、中でも麻実さんのときは超豪華だった。

「春日野八千代先生と御一緒に舞わせていただくのが夢でした。その夢が叶い、さよならのときに花の踊り絵巻という日本物のシヨ一の一場面で、連れ舞をさせていただきました。そのころかなりお年を召されていたと思いますが、とってもおきれいで、凛々しい立ち姿が素晴しかった……。白薔薇はらばらのプリンスと呼ばれた方でしたからね」

その春日野八千代がつい先日（八月二十九日）、最年長の団員（宝塚名誉理事）として亡くなった。九十六歳だった。

最後の舞台は四年前の宝塚舞踊会で、清元の『浜行平はまゆきひら』を舞い、しっかりと足さばきで鮮やかな扇取りを披露し、観客を驚かせたという。

ところで、麻実さんの退団後、最初の出演

作品ミュージカル『シカゴ』の主役（ヴェルマ・ケリー）を引き受けるにあたっては、面白い話がある。

「東宝からのお話なんですけど、私はもう舞台を離れ普通の生活をしたと思っていたのに、御返事はちよつと考えさせていただきました。とお伝えしたら、あなた、こういう仕事を引き受けなかったら、今後どんな役も出来ませんみたいな捨てぜりふをお吐きになり出ていかれたんです（笑）。その言葉にムカツときて、翌日、お受けしますとお伝えしたんですけど、多分勘違いなさったんですね。役不足とか、作品に違和感があるとかおとりになつたんだと思うの。でも彼のあのひと言がなかったら、そのまま家に引っこんで、私はずっと東京神田下町の女として生活してたかもしれないんです。彼のおかげで今があると思ってます。

彼ってね、もう時効だから言っちゃうと、演劇評論の第一人者、渡辺保さんなんですよ



宝塚を退団して最初の主演作品となった『シカゴ』
のヴェルマ・ケリーを演ずる麻実さん。

(笑)。あのころは東宝の名プロデューサーでした」

大当りした『シカゴ』の次に『マクベス』の話が松竹から来て、このときはすんなり引き受けた。

『マクベス』で出会った演出家がジャイルス・ブロックさん。私、宝塚退団後の十年間は、なぜか日本人の演出家にはお世話になってないんです。『シカゴ』は、トニー・ステイーブンさんだし、『サド侯爵夫人』や『双頭の鷲』はデヴィット・ルヴォーさん、『イサドラ』はロバート・アラン・アッカーマンさん、という具合でしたから。最初のストリートプレイだった『マクベス』のときのジャイルスには、多くのことを教わりました。演劇は主役が頂点に立つピラミッドじゃなくて、みんな横並びのフラットなんだ、っておっしゃるんです。いろんなキャラクターがあって、それぞれがその持ち味で力を出して、みんなで作っていくのが舞台なんだよ、とか

大切な事ですね。芝居というのは客席から見える空間だけじゃないんだ、そこへ登場してくるためには何か理由があるわけだから、その前から芝居が始まってなきゃいけないんだ、とか、色々なことを」

宝塚やミュージカルの世界とは、ずいぶん調子が変わったことだったろうと思う。

「最初の稽古のとき、一生懸命自分のところのせりふを覚えいどんだら、突然ジャイルスが、ここでにわか芝居で夫婦喧嘩をしてみなさい、って。そんなエクササイズみたいなこととしたことなかったし、戸惑っていたら、じゃあ、二人でどこかへ行こうという約束を夫が破った、という設定で……はい、って。これを乗り越えない限り、絶対先には進まないよ、という笑顔なんです。それで私がお相手の江守徹さんにまずけんかをふっかけ、向こうが適当にかわすからどんどんエスカレートしていって、最後にはついにかみ合いまでになったとき、オーケー、わかった？ 相手



演出家のジャイルさんから多くの事を教わったという
『マクベス』の舞台に立つ麻実さん。

の言葉や動きを全部感じて、こっちへもらったら、それを全部相手に返さなきゃいけない、これが芝居なんだよ、って教わりました。芝居の基本で、一人稽古は程々にということですね。

それに、メイクにしても、宝塚退団直後なのでまだあの独特の濃化粧から抜け切れていなかった（笑）。そしたらジャイルスが、ちよつとそのまつ毛片方だけ取ってみて、その顔を鏡で見てごらん、そのほうが自然でかえって目がハッキリするだろう？ っ。演技の基礎も、スタッフ、キャストとの関係も、全部その穏やかな演出家がていねいに教えてくださいました」

ジャイルスとはその後『ハムレット』でも顔を合わせた。女優麻実れい演じるハムレット王子は、長い髪をソバージュにして中性的な不思議な雰囲気をもし出し、高い評価を得て彼女にとって初めての読売演劇大賞、最優秀女優賞を受賞する。

「そういう意味でも彼は恩人なんです。今でも舞台はフラットで作られる、ということが強く刻みこまれていて、私はそのときどきのキャスト、スタッフの名前は全部覚えますよ。一人では絶対にできないのが芝居だし、そういうことでなごやかな空気がどんどんふくらむし、これってとっても大事なことだと思うんです」

何事も人間関係だが、演劇の世界ではとりわけそれが重要になる。麻実さんが長く主役の座を保っている一因だろう。

「蜷川幸雄さんでもおかしい話があるの。チエホフの『桜の園』のラネーフスカヤ夫人がびつたりだよ、って言われて、そうですか？ っって喜んだら、ほんと、バカだよなあ、ぼーっとして先が読めなくて、って（笑）。それならいっそ、最後の幕切れは桜の園も家屋敷も人手に渡って、これまでの大変な大女優さんたちは泣き泣き引っこむんだけど、私は

出たかった井上ひさし先生の作品の初出演となった
『箱根強羅ホテル』の麻実さん。
新国立劇場公演『箱根強羅ホテル』撮影：谷古宇正彦



笑って引っこみたい、つてお願いしたんです。
だって、パリへ行けば恋人と会えるわけだし
よ。桜の園を失ったくらいじゃ泣かないと思
う、と言ったら、いいよ、好きなようにやつ
てごらん、って」

この『桜の園』は平成十五年のシアターコ
クーン。元小作人の息子で今は大金持のルパ

ーヒン役には香川照之が出て好演した。

「ああ彼、よかったですね、なんて素敵な若い役者だろうと思いました。今度、市川中車を襲名なさって、あのころからずっと歌舞伎の舞台に立ちたいという望みがあつたのを感じていたので、ここで形になってよかったな、と思いました」

そしてまた麻実さんにも長年の望みを持ち続けて、それが実現した例がある。

「井上ひさし先生を口説き落したあの話ね（笑）。私はたいてい棚からぼた餅で、自分から行動することはほとんどないんですけど、他の方の井上さんの芝居を観に行つて先生に会つたり、劇場の廊下で偶然すれ違つたりすると、必ず言つてたんです。私、先生のあの空気が好きなんです。本当は私、こう見えても下町育ちで、モンペ姿だつて似合いますから、とかね（笑）。そしたらある日、プロデューサーが、ついに来ました来ました、でもロシア人の役ですけど、つて。やだあ、日

本人になりたくて一生懸命おねがいしてたのに、あきらめ切れず何度か先生にお願ひしていただいて、やっとハーフにまでこぎつけました（笑）」

それが『箱根強羅ホテル』（平成十七年、新国立劇場中劇場）。麻実さんの山田智恵子役は、ロシア人学校の教師。敗戦の年の四月、ソ連を仲介として和平交渉を進めるべく画策する外務省参事官と、仮りにソ連大使館となつた強羅ホテルの怪しげな従業員たち（内野聖陽や段田安則）のおかしな行動には笑わせられた。

「ホテルの管理人役の梅沢昌代さんとのやりとりが、初日の一日前ぐらいにやつと届いたんです。先生はいい作品をお書きになる上にほんとに優しい方なんですけど、遅筆な方ですからね。必死で憶えるのが精一杯で、初日です。それを御覧になつて、一幕目は安心して観られましたけど、二幕目からはドキドキしました、つておつしやつた途端、俳優全員

の冷たい視線がズバツと井上さんに集って、責任は誰なの？　ってね（笑）。私は初めてでしたけど、いつも公演が終わる何日か前に新宿の焼き肉屋さんに全員を連れてつてくださるのが恒例なんですって。好きなお食べなさい、って先生の優しさを感じました。みんなに苦労かけるけど、僕が死にもの狂いで書いたんだから、一字一句間違えてくれるな、きちんと言ってくれさえしたら、ちゃんとその役のキャラクターになれるはずだから、ってね。初日前に台本が来なかったのにはドキドキしましたが、でもとっても楽しかった」井上さんはそれから間もなく、文化功労者に選ばれた。

「それで私は祝電を打たせていただいただけなのに、すつごく素敵なオレンジ色の皮の名刺入れをいただきました。僕の氣に入った物がようやく見つかりましたので、というメッセージつきで。大切に、お守りみたいにしてしまつてあります」

実は私もお祝いの葉書を出しただけなのに、同じ名刺入れをいただいている。井上さんが平成二十二年四月九日、七十五歳で亡くなった今となつては、大切な形見の品になった。

「こまつ座からお話があつて、『水の手紙』——私たちが井上先生へのラブレターを捧げるステージにも出演しました。その後、『キネマの天地』という作品にも大女優の役で出演して、先生の出身地の東北地方にも巡演して、そこでも吉例のお肉パーティーが開かれたんです。そういう配慮の優しい方でしたね、もつともつと御一緒したかった」

もう今後の新作は望めなくなったが、麻実さんが是非挑みたい井上作品があるそうだ。「それは『頭痛肩こり樋口一葉』の一葉役、ロシア人のハーフでもなく、大女優でもなく、純粋な下町の女性の役です、いつの日にかと、ずつと夢は持ち続けたいと思っています」

（この項つづく）

本紙連載の関容子さんの
「会いたい人」が単行本
になりました！

好評をいただいています、関容子さんの連載「会いたい人」が『舞台の神に愛される男たち』と題されて単行本になりました。登場する十三人の男たちはみなこの『浄土』に連載された男たちで、個性的なその生き様が一冊の本にまとまりました。装丁の個性的なイラストも魅力的です。

登場人物（掲載順）

柄本明 笹野高史 すまけい 平幹二朗 山崎努

加藤武 笈田ヨシ 加藤健一 坂東三津五郎

白井晃 奥田瑛二 山田太一 横内謙介

発行 講談社

定価 本体1900円（税別）



小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第三十五回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

アルバイタルハイム
「労働者の家」を深川に



赤いベルリンの賃貸兵舎

「労働者の家（アルバイテルハイム）を体感してみたい」という渡辺海旭の直感にも近い願いがようやく叶うことになった。

ドイツ人官僚が、しぶしぶ案内してくれたのは、もう一つの赤いベルリンだった。そこは「元祖赤いベルリン」とは反対側にあたるベルリン郊外にあった。

黒い煙を吐き出す工場群を遠くに望み、その手前には薄汚れたコンクリートの箱が林立している。近寄るほどに、汚物が撒き散らかされ、そこから漂う臭気に、海旭以外はみな顔をしかめ鼻をつまんだ。

「元祖赤いベルリンもそうだったが」と海旭がひとりごちた。「ここも住宅というよりまるで兵舎の掃き溜めだ。人間の生活が感じられない」

ドイツ人官僚が目を丸くして自嘲気味にいった。「これは恐れ入った。実はこの手の住

居は、口の悪い連中から賃貸兵舎（ミーツカゼルネ）との蔑称をたまわり、ベルリンをはじめ主要な工業都市に族生、残念ながらいまやわがドイツ帝国住宅政策の瑕疵の象徴といってもいいかもしれん」

十九世紀後半、ドイツでは急速な工業化がはじまるが、ベルリンなど中世からの城郭都市の旧市街には土地の余裕がないため、それまで農地や荒地だった郊外に続々と工場が立地。そこへ仕事を求めて農村から人々が流入。彼らのための住宅が必要となり、当初は産業革命と近代化の先達であるイギリスにならって労働者用の庭付きコテージをつくることが企図されたが、現実の前に頓挫。そこで一八五三年、政府は集合住宅の建築基準を大幅に緩和（高さ二十メートル、中庭の広さ五・四メートル四方）する建築条例を施行。これによって小さな中庭の四辺をコンクリートの箱が囲む、安普請のアパートが次々と造られるようになる。それらは形状から「賃貸兵舎」

と呼ばれたが、それでも流入する労働者を吸収しきれず、借家人の労働者が他の労働者にベッドだけを又貸しする状況を招来し一層の細民窟化・スラム化に拍車がかかるばかりだった。

日本人官僚が皮肉まじりに言った。「いや、はや、平時においても臣民たちを兵舎に収容しておくとは、ドイツ帝国はいまだ戦争の最中ということですか」

ドイツ人官僚がむっとして返した。「ある意味、殖産興業とは兵器をもちいぬ国民総動員の戦争かもしれぬ。貴国の都はなんといったかな。そうそう、東京か。この五十年でわが帝都ベルリンの人口は十倍にもなった。市域は限られているので、郊外に工場と労働者住宅が建てられるようになった。いずれ東京も世界最大の賃貸兵舎都市、ベルリンのようになると断言してもいい」

日本人官僚は不服気に頬をふくりましたが、海旭はドイツ人官僚の指摘に同意せざるをえ

なかった。腹の中で「住職をつとめるわが西光寺周辺の深川や本所ではもう赤いベルリンが生まれている」とつぶやきながら、仲裁に入った。

「まあまあ二兩名。ところで、肝心の労働者の家（アルバイテルハイム）はどこかな？」

日独両官僚は皮肉の応酬から覚めると、ドイツ官僚が建ち並ぶ巨大な賃貸兵舎群の間に隠れるようにして佇む一戸建てを指差した。

「あれが社会民主党の連中が建てた互助施設だ」

生きる楽しみも提供してこそ

真の救済

日独内務官僚と駐独日本大使館書記官は「私たちはここまで」と同行を固辞したので、海旭はその場で謝辞を述べて単騎でさっそうと建物へと向かった。

と、中から子供たちが二人出てきて、海旭を認めるとにつこり笑って駆け寄ってきた。

なんと三ヶ月前、赤いベルリンを訪ねたとき、海旭を自室まで招じ入れくれたあの姉妹ではないか。先ほど再訪したところ、一家で夜逃げをして行方しれずと知って心を痛めていただけに海旭の驚きと喜びは一入だった。「きみたち、どうしてここへ」と海旭が訊ねると、姉妹は顔を見合わせ、口を揃えて答えた。

「いま、病気の父ちゃんといっしょにここで世話になってるの」

木工職人の父親は、欠勤による収入減を恐れるあまり風邪をこじらせて肺炎をわずらい仕事そのものを失ってしまったが、ここ「労働者の家」へ緊急避難しているうちに仕事を紹介してもらい来週から働きに出られるらしい。父親が常雇いになったら一家揃って新しい家へ移れるかもしれないと姉妹は笑ってみせた。ストラスブルクの社会民主党の友人が「百聞は一見にしかず」と自慢していただけのことはありそうだ。

姉妹に頼んで責任者を紹介してもらおうと、館長を名乗る初老の男が案内を買って出た。この施設の設立の趣旨は、赤いベルリンに見られる労働者の窮状を、政府に何とかしろとひたすら要求ばかりするのではなく、社会主義者も労働者のために共助の汗をかこうというもの。主たる活動は、貧窮者に仕事と宿泊を提供することだという。職業紹介は、鉄血宰相ビスマルクが社会主義者を目の敵にしていた「冬の時代」、社会主義者鎮圧法により解雇された社会民主党員の支援を目的に始められたという。

赤いベルリンに比べるとはるかに小さい宿泊施設、職業紹介カウンターに続いて立派な図書室付の集会室に案内された。中で男女が合唱の練習をしていたのにも驚かされたが、海旭の目を惹いたのは部屋の入口に貼られた案内だった。成年学級、学習会など硬派系から各種スポーツ、劇団活動など娯楽活動まで多岐にわたっている。海旭はその中に意

外なものを見つけて思わず訊ねた。

「ほう、労働者が乗馬クラブとはねえ……。それにしても政党がなぜ文化活動を。行政あるいは民間慈善団体にまかせればいいではないですか」

館長はよくぞ訊いてくれたとばかり身を乗り出した。「社会主義冬の時代を過ぎて、ようやく我ら労働者階級にも文化や娯楽を享受できるゆとりができた。でも、ドイツには階級という高い高い壁があって、中流以上の市民とそれを共に楽しむことなどできるはずもない。だったら自分たちで文化娯楽の場をつくるしかない」と

海旭は留学生生活ではどちらかというと中流以上のドイツ人と交わっていたので、ここまで階級間の断絶が深いとは思ってもみなかった。館長に指摘されて不明を恥じたが、当時のドイツでは、国民の九十数パーセントが民衆学校（小学校）を卒業して就労、中学校をへて大学まで進学するのは一・二パーセント

にすぎず、労働者の子弟は底辺のままで上層階級へ這い上がるなど夢のまた夢。スポーツや野外キャンプ、舞踏会、観劇などレクリエーション活動は一握りの中・上流の市民たちのもので、労働者階級が彼らとそれを享受することなどありえなかったのである。

海旭は「労働者の家」をてつきり救貧の互助組織だとばかり思っていたが、文化娯楽の拠点でもあることを知って自らの浅薄を恥じた。困窮者に宿と仕事を提供するだけでなく生きる楽しみも提供してこそ真の救貧・防貧ではないか。宗教者としても大いに学ばなければならぬと思った。一方でこんなことも思った。そうだ、高島米峰にもこの話を教えてやろう。米峰は堺利彦たち平民社に抛る社会主義者とも仲がよい。日本の社会主義者たちもこれには大いに学ぶべきではないか、と。

もう一つの集会所の催しは学習会らしく、十人ほどの男たちが飲み物片手に談論風発させていた。海旭は興味を覚えて館長に訊ねた。

「この施設ができる前は、ああした議論や交流はどこでしていたのですか」

「いい質問だ」と館長は相好を崩した。「そもそも赤いベルリンを見てきたのなら、お分かりだろうがね、わがドイツの労働者は仲間を自宅に呼べるような住宅環境にない。そこでみんなが集まる場所が求められる。社会民主党や労働組合が協同でこのような施設を作ったのもそのためだが、ここができるまでは党が経営する酒場がその役割を果たしていた」

社会主義政党が居酒屋を営んでいるとは驚きだったが、館長のその後の解説はさらに衝撃的だった。社会主義者鎮圧法下の社会主義冬の時代では、酒場は労働者たちが情報を交換してつながる政治運動の小拠点であり、店長はその東ね役・政治的リーダーであった。したがって社会民主党にとって酒場の店長は国会議員や地方議員の有力候補でもあった。ちなみに、ドイツ帝国議会の社会民主党議員団八十一人のうち六人を党酒場の主人が占め

ていた。実は館長も社会民主党が経営する酒場の店長兼市会議員をしていたが、労働者の家ができたのでその経験を買われて館長になったのだという。

やはり人はひとりでは生きられない。いっぱい赤いベルリンのような貧民窟で惨めな暮らしをしていても、酒場で、あるいは「労働者の家」で寄り合えば、生きていくことができる。そうした互助の場と共にその東ね役もまた欠かせない存在だと海旭は思い知らされた。

「日本版労働者の家」を着想

「労働者の家」の「視察」は短かったが海旭にとって得るものは多かった。館長に礼を述べて出ようとしたところ、酩酊した老人が、体をふらつかせながら入ってきて、いきなり館長に食ってかかった。

「なんで俺を泊めてくれんのか。仕事を紹介してくれんのか」

館長は血相を変えて怒鳴り返した。「また、あんたか、さあ、帰った、帰った。何度もいっただろうが、ここは社会民主党の党员と自由労働組合の組合員のための支援施設だ。あんたは党员でも組合員でもない。この先にキリスト教徒がやっている慈善施設があるからそこへ行け。それとも市役所の救貧窓口へ行つたらいい」

終始温厚だった館長が別人になったのに海旭は驚いた。館長は闖入者^{ちんにゅうしゃ}を追ひ払うと、バツの悪そうな顔をして海旭に会釈をし、建物の中へそそくさと消えた。

酩酊老人は明らかに最底辺の労働者だった。館長は労働者階級と中・上流市民との断絶を口にしたが、社会民主党に参加できる党员たちとそうでない党外の労働者たちの間にも深い断層があることは明らかだ。鉄血宰相の引退と共に一八九〇年代には様々な労働者の保護政策が行われるようになるが、この恩恵を受けられたのは組合に組織された労働者であ

り、未組織労働者は埒外のままだった。

海旭は社会民主党の「労働者の家」に大いに啓発をうけただけに少々失望したが、思い直した。日本でも社会主義者が救貧活動に挺身するかもしれないが、このような内部矛盾を抱えて解決できないはずだ。そこにむしろ宗教の出番がある。さらに、わが日本政府の救貧政策の無為があり、ここにも宗教の出番がある。海旭は、日本人内務官僚が吐いたこんな本音を思いだした。

「いま我が国は富国強兵・殖産興業が最優先。貧窮者に手を差し伸べる余裕などない。だから国は形だけで、救貧・防貧は国以外の人々がやってくれば一石二鳥、いやそれで諸外国から一等国と見られるなら一石三鳥だ」

救貧を国の代わりに宗教家や社会事業家にさせようというムシのいい話で、とんでもない国の責任放棄だが、かといって国を非難していればいいのか。赤いベルリンを見るにつけ、手をこまぬいていれば、日本の将来はま

さに無間地獄だ。やはり社会主義者は社会主義者として、宗教家は宗教家としてそれぞれの立場で救貧に取り組まなければならない。そんな思いをますます強くするのだった。

*

暮れなずむ夕景のなかで海旭は「労働者の家」に別れを告げた。この視察で得たものを参考にして、日本に帰ったら、ぜひ救済施設・共済施設をつくろうという思いが海旭の中でしっかりと像を結びはじめた。ついには頭で場所まで浮かんできて、内心で「そうだ、平野町あたりがいい」とつぶやいていた。平野町とは、海旭が端山海定の後をついで住職をつとめる西光寺から歩いて半刻ほどの距離にある。海旭が思いついたのは、その地区の成り立ちがあの「労働者の家」界限に似ていたからだった。

平野町は、江戸時代に寄洲のできた所を幕府が埋め立てた造成地で、「水場」と呼ばれていた。深川の辺りに飲料水売りに来る船

が舫うことから付いたといわれる。明治の中葉までは田んぼだったが、次第に住宅化がすすむなか、金属関係の工場が陸続と進出、ここの仕事を求めて地方から労働者が流入。その多くは宿泊する場所のあてもなければ、定職ももたない貧窮者であった。

ドイツ人内務官僚はやがて東京は赤いベルリンになると予言したが、すでに平野町は海旭がドイツに留学するときにそうなりつつあった。「日本版労働者の家」をつくるにはうってつけの立地だった。海旭は西光寺と深川平野町があるあたりに向かって居住まいを正して黙礼すると、しばし合掌した。

（なお、深川平野町に浄土宗労働共済会という名の「日本版労働者の家」が呱呱の声を上げるには、それからなお五年余、故国が海旭を呼び戻すまで待たねばならなかった）

（つづく）

念仏の功德は、仏も説きつくしがたしとのたまえり。また智慧第一の舍利弗、多聞第一の阿難も、念仏の功德はしりがたしとのたまひし、広大の善根にて候えば、まして源空などは、申しつくすべくも候わす。

(法然上人『鎌倉の二位の禪尼へ進ずる御返事』)

お念仏の功德は、仏さまでさえも説き尽くし難いとおっしゃっています。

また、もつとも智慧のあつた舍利弗尊者や、もつとも博学であつた阿難尊者さえも、お念仏の功德は知り尽くし難いとおっしゃっています。

お念仏は、それほど広大な功德を具えた尊い行でありますから、ましてやこの源空（法然）などに、それを申し尽くすことなどできません。

完璧・究極の保険

先日、新聞で保険会社の広告を目にし、ふと疑問が湧いた。自分が加入している保険って、どんなだったっけ——？

二十年近く入っているが、どんなとき、どんな保障を受けられるのかすっかり忘れている。ふだん、「〇〇保険の証券はここにあるから、オレが病気が怪我でもしたら、必要な手続きをとるように」と家人に言っておきながら、である。慌てて証券やら説明書を引っ張り出してくる。イラストやグラフが多用されていて一見わかりやすそうなのだが、はつきりしない点も多い。そこそこにある見慣れない用語が煩わしい。細かい字の但し書きもめいっばい。すぐに読む気が失せた。そもそも保険とか株とか先物とか（ちよつと違うか……）、投資的なものには興味が無い。その大きな理由は「わかりづらいオマエ（説明書）のせいだ！」などと文句を言いたくなったが、自分の読解力のなさを棚に上げて説明書のせいにしても始まらないと、頑張つてにらめっこを続けた。

驚いた。四年後の誕生日以降、なんと掛け金がほぼ倍額になる。そういえば何年前か、「十年ごとの更新」とかいふシステムにより、掛け金がグンとアップしたのを思い出した。年齢が上がるにつれ死亡のリスクが高まる分、納める額が増える理屈はわかるが、さらに今の二倍に！ 困った。正直ツライ、ツラ

過ぎる……。大体にして、保険の内容が自分自身のライフスタイル（片仮名で書くような洒落たものではないが……）に合っているかどうかという検証などしたこともない。若い頃、なんとかレディに勧められるまま入ったきりだ。

そこで、保険内容を無料で精査し、内容の見直しなどをしてくれる第三者機関の扉を叩いた。担当になってくれた方に、筆者の保険に対する関心の低さと知識のなさを正直に告げると、「こちらに来られる方のほとんどが、そうです（笑）」。妙な連帯感にひたり、とりあえずは安堵。持参した書類を差し出す。数分後、ひと通り見た担当氏いわく、「うーん完全掛け捨てですね……。この手の契約内容の商品は実は悪名高いんですよえ、昔から……」。安堵は怒りに変わり始めた。二時間以上、嘔んで含めるような説明をしてもらったおかげで、ようやくいろいろわかってきた。このまま「継続」はあり得ない、即刻見直し！　いくつか提案書を作成してもらい、帰途についた。

「これ（提案書）ならオレにもわかる」と電車であらちちら読んでいて、そういうば、と思った。お念仏って、保険に似ていないか――。

おっと、誤解を招きかねないとかえかもしれない、と即座に反省。でも、やはり構造は似ている……。もちろん、保障内容（功德）や条件（積むべき行）

は娑婆の保険とは比較にならないが。

まず、死亡に際しての保障が大きい。すなわち、臨終に阿弥陀さまがあなたの菩薩とともに来迎してくださる。それによって心が平穏正念しやうねんとなり、そのままで最期の一線——断末魔——を越えることができる。極楽浄土という、苦しみ辛さのない世界に連れて行っていただける。なおかつそこでは、先立った懐かしい方々との再会もかなう。盛りだくさんの内容ではないか。しかも、お金をいくら積んだところでどれも手に入れられるものではない。つまりどんな高額な保険金とも比べられない。

条件はと言えば、「下十声しもじゅうせい」^一声等いっしやうどうに至るまで」(善導大師『往生礼讃』)とあるから、掛け金(積むべき行)は小額でもよいということになるうか。しかも途中更新による増額もなければ、掛け捨てでもない。加入に際しての審査も、年齢制限も、手続きもない。ただ、臨終の夕べまで途中解約しないこと(念念相続)、そして誠の心で、自らの罪深さ愚かさをよくわきまえて阿弥陀さまを信じ、往生を願うという三つの心構えを具えることが大切、というのだ。

“人生最大の難事を完璧に保障してくれる究極の保険”などと言ったら、法然上人のお叱りを受けそうではあるが……まだの方はお早めにご加入を。(小村正孝)

法然上人を
めぐる人々

極樂に
歸つた
法然上人

挿画・佐野芳朗

石丸晶子

第六回



十六

一月二十三日になった。この日も朝から小雪が降り続けている。

蠟燭が燃え尽きる前の一瞬の明るさであつたらうか、その数日、上人はいささかの元氣を取り戻されたように見えた。

半身を起こして薬湯もしっかり飲まれ、粥も召し上がる。

しかし医師の診断では、お元氣に見えるのもここ一兩日のことだという。

昼近く、遂に堪りかねた信空は、弟子たちを代表して法然上人の枕元に座るといった。

「このところ、師僧におかれましては元氣を取り戻されたかにお見受けいたします。しかし人の命は無限ではございません。過去の御衰弱をお見受けいたしましたわたくしども弟子にとりましては、やはり氣がかりでございます」

信空は言いよどんでことばを切った。

病室につめる数人の弟子たちも、息を潜めて皆が次のことばを待っている。

師と弟子の間に深い沈黙が落ちていった。

法然上人も信空の次のことばを待たれている。

と、信空は涙を頬に伝わせながら思い切ったように、

「古来の先徳にはみな遺跡があります。しかしわが師には精舎一字の建立もありません。われらが寿命にはみな限りのあることを思えば、万一にも御入滅の後には、どこを御遺跡とすればよいでしょうか」

（ああ、信空はそれを尋ねたかったのか。長年わたしと起居をともしてきた弟子たちならば、そのようなことは尋ねなくとも疾うに分かつていたろうに……）

悟るに疎い弟子を持つ師僧の悲しみと愛おしさが、法然の胸にもこみあげてきた。

上人はかすかに微笑してお答えになった。

「どこか一廟をもつてわたしの遺跡とすれば、法は広まらぬであろう。わたしの遺跡は諸州至るところにある。それは、念仏の弘通はわたしの生涯の願いであつたが、身分低い男女の柴の戸、海人や漁師の葦の苫やまで、念仏の声のするところはすべてわたしの遺跡なのだ」

はつとした厳肅な空氣が弟子たちの間に立ち込めた。

とそのとき、信空の後ろに控えていた勢観房源智が

「お師匠様」

と呼びかけると法然に願ひ出た。

「師僧のただ今のお言葉伺ひ、わたくしは目が覚めた思いがいたします。しかしわれらは元來み教えを悟るに疎く、今悟ったかに思つても翌日になればもう忘れてゐる魯鈍な者でございます」

源智の頬にも涙が伝つた。それを袖でぬぐうと彼は

「万一の御入滅の後、われ等が信心の中心となるみ教えの核心を、文字にしてお残しいただきとうございます」

「筆と色紙とを用意いたせ」源智の願ひを聞くや上人は言った。

十七

源智が筆と色紙とを、半身を起こした法然上人もとに持つてきた。そこに小机が持つてこられる。

一同の張りつめた空氣の中で、上人は半身を起こすと机に向かい、弱つたお体で一氣に書き始められた。法然の教え・浄土宗が、それ以前に唐土やわが国の祖師たちの間で称えられていた觀想念仏とはことなることの核心が、明文化された一瞬であつた。

唐土我朝に、諸々の智者達の、沙汰し申さるる觀念の念にもあらず。

また学問をして、念のこころを悟りて申す念仏にもあらず。ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがひなく往生するぞと思ひ取りて申す外には別の仔細候わず。ただし三心四修と申すことの候うは、皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ううちにこもり候うなり。

この外に奥ふかき事を存ぜば、二尊のあわれみにはずれ、本願にもれ候うべし。

念仏を信ぜん人は、たとい一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、凡入道の無智のともがらに同じうして、智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし。証のために両手印をもつてす。

浄土宗の安心起行この一紙に至極せり。源空が所存、この外に全く別義を存せず、滅後の邪義をふせがために所存をしるし畢んぬ。

建暦二年正月二十三日

(花押)

書き終えると、法然上人は日付の下に証として両手の判を押された。

十三歳で叡山に登って以来、道に迷い苦しみぬくこと三十年。ここに書き出されたものは、四十三歳での回心後、日ごとに深まる確信であった。

悠久の大宇宙の中に生まれて、有限の身である人間に出来ることといえば、悠久永遠の絶対的存在たる阿弥陀如来と、その化身である釈迦如来に念仏して随ふことしかないのではないか。

難行苦行を重ねたとて、人間が行きつける処には限度があるのだ。このことは叡山にいたころから法然自身が周囲に見てきたことであつた。自力で如来の元に行こうとしても、人間の身には限度というものがあるのだ。

一瞬の感慨が過ぎ、法然上人は両手をささげて色紙を受けようとしている源智に慈しみ



の眼差しを注いで手渡した。

十八

一月二十五日になった。医師の診たてでは今日明日あたりにお迎えが来るのではないかという。

おろおろする弟子たちの中で、しかしその法然上人はといえば、朝から病床に正座してひたすら念仏を称えておられる。

すると正午ごろ、何を思われたのか、長年所持しておられた慈覚大師円仁の九条の袈裟を弟子に持ってこさせて被着。頭を北に、西を向いて床に臥された。

弟子たちはあわてた。

（いままで単座念仏しておられたのに、いよいよ命終という時になって床に臥されるとはどうしたことか）

弟子たちの気持ちを表して信空がいっぱ。「如何なものでしょうか」

それを聞いて上人は微笑された。そして仰せられるには、

わたしは今このわけを言っておきたい。あなた方はよくこそ尋ねてくれたと思う。

わたしがこの世に生きていたのは浄土への道を切り開かんがためであり、今、魂を極楽へかえすのは往生の仕方を示さんがためである。

法然上人はそこでことばを切られた。

そう弟子たちを諭しつつ、上人自身、この世に生きていた己の使命をあらためて見つめておられるようであった。

病床の周囲には咳払いの声一つ聞こえない。深と静まり返った厳肅な空気あたりを制している。

上人は再びことばを継がれた。

わたしがもし端座して死んだならば、人は

さだめしこれを学ぼうとするであろう。

しかしもしそうであれば、病む身にあつて起居意のごとくならぬ場合も多く、又おそろくは意識も定かならぬさまで絶命することも多いに違いない。これゆえにわたしは今、端座できぬというのではないが、平臥しているのである。わたし以前において、釈尊はすでに頭北面西の姿で入滅された。これも人々のためであつたのだ。わたしがどうして、釈尊以上のものであろうか。

法然上人の病が篤いことは洛内外に広まっていた。法然上人が往生される時には紫雲たなびき、二十五菩薩を従えた阿弥陀如来を目にすることができるとではないか。

そう期待する素朴な民衆が上人の草庵に押し寄せ騒ぐなか、それから半時、弟子たちに言い残すこと、伝えるべきことはみな完成した、というように、法然上人は静かに、八十歳の生涯をあとに浄土に帰っていかれた。

三月、東山大谷に葬られた法然上人の廟堂の前に、乳幼児三人を連れ旅装姿の親鸞一家が合掌していた。一家はこれから再び東国に旅立つていくところであつた。

「まこと阿弥陀如来の化身ともいふべき御方であつた……」

そうつぶやく親鸞の目には涙が溢れている。

師僧法然上人の死は二月半ばに越後にも届いていた。即刻京に駆けつけたい心かられる中、親鸞は雪解けを待つてようやく上洛を果たしたのであつた。

「師僧の遺跡、息吹がいたるところに残る京に帰ろう！京で暮らすのだ」

はじめ親鸞はそのつもりであつた。

しかし京に到着して、まず、今は主無き草庵に信空を訪ね、自身の気持ちを伝えると信空はいった。

「そなたの気持ちはよく分かる。また師僧も

喜んでおられよう。しかし」

信空はことばを切り、しばし親鸞を見つめるといった。

「先の法難を招いたのは親鸞房だと今も思い込んでおる弟子たちは多い。そなたが師僧の御命を縮めたという者もいるのだ。今後、京に帰ったとて京はそなたにとって決して居心地のよいところではなからう。好ましからぬ事件も起こるやも知れぬ」

そういうと信空は、

「そなた、東国で布教することにしてはどうか。そなたも知るように、先の法難の前、師僧は聖光房（弁長）はじめ故郷を持つ弟子の多くを故郷に帰させた。それはみ教えを広めるためであったのだ。京にはすでに多くの弟子たちがいる。そなたは東国で師僧の心を継いでどうか」

信空の言うとおりであった。

親鸞は再び家族を連れて東国に戻ることにした。そこで師僧から受けたみ教えを東国の

人々に伝えよう。

信空に勧められて数日後、法然上人の御廟に出立の挨拶を済ませると、朝もやの中を親鸞の家族五人は、東国を目指して旅立っていった。

法然の死後、その教えは、念仏禁止令が出されて法然の廟墓が暴かれるなど苦難の日々が続いた。

しかし信空や源智をはじめ多くの弟子たちによってその教えは守り継がれ、畿内はもとより九州に、東国に、そしてさらに全国に広がっていった。

日本仏教は奈良仏教系（法相宗、華嚴宗、律宗など）、平安仏教系（天台宗、真言宗）、そして鎌倉仏教系（浄土宗、浄土真宗、日蓮宗など）、また禅宗（臨済宗、曹洞宗など）などをはじめ多くの宗派をもっているが、このなかで信徒数からいえば法然に始まる浄土教系信徒が圧倒的に多く、浄土宗、浄土真宗合わせて2000万人に及んでいる。

古き伝統技 三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門

古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)38421289
振替0018012145231

多くの人々が、法然の切り開いた新しい道
によって生き、新しい道に希望を見出して死
んでいったのである。

臨終を前にして死の恐怖にさらされたある
僧侶は、最期には

「法然さんのところに行く」
といって息を引き取ったという。

死を前にしたある会社員は、宇宙の謎に踏
み迷う中、最期は

「なむあみだぶつ なむあみだぶつのお六
字は 父にも母にも 縋り給える 六字にあ
らずや」

という、薬包紙に書かれた歌を残して旅立
ったという。

了



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

FORUM
浄土の広場

● 演

〈特選〉三國志演義三卷二尺寝

金井 楨

中国の四大奇書の一つとして、人気のある『三國志演義』は全二十四冊だから、この「三卷」は読もうとして出したのでなく、枕にちようどよい高さということだろう。劉備や関羽、張飛が夢に出てきそうである。

〈佳作〉演説の白き手袋夏の雲

井口 栞

夏の寄席ただ演目をめくる役

河合美佐子

演奏会場末の小屋の扇風機

浜口佳春

● 力

〈特選〉坂道を全力でゆく風鈴屋

山内 桃児

坂道を登っていくのか降っていくのかは、読者によって思いが違うようだが、私は登るほうにしよう。坂はがたがたで急なほうがよ

い。車はアクセルを思い切り踏んでいく。どの風鈴も一斉にそれぞれの音を響かせる。

〈佳作〉

汗拭いてまたすぐ汗の力士かな

金井 楨

力石境内にきて汗流す

増田信子

力こぶ腕を見せ合い夏に入る

山口信子

●自由題

〈特選〉

かたつむり殻傾けて動き出す

吉崎美和子

かたつむりは、でんでんむしの歌によってだけでなく、子供にとつて親しい生きものだった。今は随分遠い存在になってしまったような気がする。この句「殻傾けて」は、私達に親しさを取り戻してくれたようだ。

〈佳作〉

朝顔の純白にして売れ残る

斉田 仁

ゆつたりと泳いで海月潮に乗る

石原 新

白南風や蜂の巣低き庭の鉢

井村善也



誌上句会〈編集部選〉

■演

夕闇となりて演ずる薪能
小嘶を演じ冷や汗夏の宵
求愛を演じては消ゆ夏の鳥
演出の如くあらわる螢かな
好演のあとは金魚になっている
羅の演者らごった煮の通路
演繹と帰納で果てる夏の恋
客演の蟬がうるさい夏の庭

■力

力走のマラソン癒すサクラランボ
深緑の沢を降りて力餅

浄土誌上句会の
お知らせ

締切・二〇二二年十月二十日

発表・『浄土』二〇二二年十二月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■自由題

すててこのゴムの力や日曜日
雲の峰力まかせに紐を引く
夢を見るための聴力夏の浜
念力や積乱雲の彼方まで
万力の鈍き光や下山忌
夕立くるまで引つ越しの馬鹿力
夏雲のかたち包容力と読む

物乞いの馴染顔来る梅雨最中
坪庭の立木にすぎる蟬の殻
木下闇囁き合うて道祖神
その女や尼人道我が母よ
地下鉄の入口は穴梅雨晴れ間
木の肌は人より暑くなっている
フエルメール青を残して西日かな
一対のつちふまずある薄暑かな
風吹いて七夕飾りいきいきと
真つ青なベロ見せに来る祭りの子
行きあたりばったりに塗る海の家
父と子が顔で喰らいし西瓜かな

工藤 掉
近田 恵
内藤隼人
小林暢夫
長谷川裕
新島敦子
安住優香
佐藤雅子
森 懐人
當間あさ子
飯島英徳
近田 恵
濱野具円
千駄木敏郎
三宅月彦
前橋菜々
佐久間駄々
笠井亜子
大森吾郎



焼栗を剥いてた母の姿かな

岱潤

先日虎井まさ衛さんという方の講演を聴いた。性同一性障害に苦しみ、ずっと闘ってきた方だ。彼に最初に言われた「普通の人は、頭と身体と戸籍が同じ性であることが、どれだけ幸なことかわかっていない」という言葉にがっつんと来た。そんなこと、今までに一度でも考えたことがなかったからだ。

マジョリティー、マイノリティーという言葉を人権の講習会ではよく聞く、そしてこのマイノリティーの方々の立場に立ち、その気持ちを少しでも理解できるように努力するのが人権学習だ。日本の社

会では、被差別部落出身の方々も、在日朝鮮民族の方々も、そして身体に障害を持っている方々も皆マイノリティーの方々だ。虎井さんのような性同一性障害の方々は、一人に一人と言われる遺伝子による障害だという。それなのに、同性愛者や女装願望の人と誤解されたり、気持ち悪がられたりして、差別されることが多い。実際戸籍上の性と現実が違うことにより、正社員になれなかったり、保険証を使って医者に行くことができなかったり、結婚できないなどの差別が起きている。

虎井さんは様々な差別を、母親の支えとやりたいたいことがあることと、信仰によ

って乗り切ってきたという。考えることも想像することもできなかった虎井さんのような方の苦しみを、わずかにかりでも知ることができたことは、私を少しだけ成長させてくれたような気がした。(長)

編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

浄土

七十八巻十月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十四年九月二十日

発行 平成二十四年十月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一

東京都港区芝公園四・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三三・五七五・六九四七

FAX 〇三三三・五七五・七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌「浄土」
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光園寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養蓮寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(大本山・清浄華院)
拙 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>



泰雲の

文と写真

浄土真宗東京東本願寺派
光徳寺・平井泰雲尼
茶道歴30年

美味探訪

山忠本家酒造 愛知

10月1日は『日本酒の日』。“酒造りの元旦”とも言われています。そこで、愛知県の地酒『義侠』純米生原酒60%（山忠本家酒造）をご紹介します。

山忠本家酒造の創業は、江戸時代中期。山田明洋社長は、「酒造りは米作りから」の信念を実践し、最高の酒米である山田錦に徹底的にこだわり、特A地区に指定されている兵庫県東条地区のものだけを使用。石高を大幅に落としてまで全量純米仕込にこだわって造られたのが、この『義侠』です。

青りんごのような澄んだ甘い香りが鼻にぬけ、甘味と酸味の調和のとれた深い味が口のなかに広がる。飲んだあとのスッキリ感は料理との相性がよく、思わず「美味しい！」と声が出るお酒です。

多くは嗜めない私にとって、日本酒はまさに料理のひとつです。お勧めします。

なお、取扱い店は電話でご確認ください。



1800ml 3,150円
720ml 『義侠』1,575円

愛知県愛西市日置町1813
Tel 0567-28-2247
Fax 0567-26-4846

法然上人鑽仰会の

本

当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036

こうるじっぽう 響流十方

其の二

袖山榮輝・林田康順・小村正孝

法然上人鑽仰会

響流十方こうるじっぽう

其の二

640円(税別)

響流十方こうるじっぽう

600円(税別)



在庫
僅少

月刊『浄土』 バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円(税別)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)500円(税別)



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より